

平成28年度 大分県学力定着状況調査結果（中学校：英語）

1 結果のポイント

全問題数：35問（知識25問、活用10問）

- ・偏差値（知識49.9 活用50.2）で、昨年（知識49.9 活用49.9）から活用が0.3ポイント上昇。
- ・「書くこと」の領域は、正答率は59.8で、目標値57.3を上回っているが、場面に応じて書く英作文に課題があり、無解答率が20%を超えている。
- ・「聞くこと」「読むこと」の領域の偏差値はそれぞれ、49.5と49.6。「対話文の応答」と「長文の読み取り」に課題がある。
- ・今回の調査においては、外国語理解の能力と語彙・語法の知識・理解に課題があることが見て取れる。

2 課題が見られた問題と指導の改善事項（領域別）

（1）「聞くこと」

- ◆会話の要点や流れ（だれが、どの立場で、どのような意図で、何を話したか）をとらえる力が不足しているため、断片的な理解にとどまっている。



◎多様な表現をインプット・アウトプットする活動

例えば、授業開始直後のウォーミングアップとして日常生活で起きたことを教員がまとめた英文で話し、生徒がその内容に対して応答するなど、インプット及びアウトプットする機会を積極的に取り入れたい。

◎目的を持って聞く活動

直前に聞いた単語が含まれた誤答を選んでしまう生徒が多い。日頃から、目的を持って聞く活動を行うことが重要である。例えば、文字情報なしで音声を聞かせて、適切な応答をさせる、内容に関する質問に答えさせるなど、目的を持って聞く活動を取り入れたい。

領域	正答率		目標値	偏差値
	県計	県		
聞くこと	70.9	70.9	71.0	49.5
読むこと	63.1	63.1	62.5	49.6
書くこと	59.8	59.8	57.3	50.6

(2) 「読むこと」

- ◆英文全体の意味を把握し、文脈や前後関係を押さえながら読むことに課題がある。英文の概要を理解すること、英文中から必要な情報を探し出すこと、まとまった量の英文の要点を理解することに課題がある。今回の調査では、直前に出た単語を含む誤答を選んだ生徒が多くいた。



◎学習者のレベルに合った文章をたくさん読む活動

英語に接する時間を個人学習も含めて多く取らせることができるように指導を工夫したい。生徒にとって身近な素材を選び、イラストや写真などを補助としながら理解する活動を取り入れたい。

◎目的に合わせて英文を読む活動

「読むこと」の指導は、これまで「内容を正確に読み取る」ことに多くの時間が割かれてきた。しかし、現実のコミュニケーションの場面では、「内容を大づかみにする」「必要な情報のみ検索する」などの読み方が求められることも多い。英文にあたる際は、読む目的を示し、目的に沿った活動や発問を工夫したい。

◎逐語的な読みから脱却し、英文を意味のかたまりとしてとらえる活動

ふだんの授業において、単語や短文の正確な理解を目指す指導を積み重ねるだけでは、文章全体を理解する力が十分には身に付かない。教科書の本文であれば、最初から詳細な読みに入るのではなく、英文を意味のかたまりごとにとらえて読み取らせる指導が必要である。

(3) 「書くこと」

- ◆対話の流れに合った英文を、適切な表現を用いて書くことができない。
- ◆文を作ることはできても、まとまりのある文章を書くことに課題がある。



◎文脈に沿った内容を書く指導の工夫

会話文に限らず、文脈に沿った内容を自分の言葉で表現できるようになるためには、単に英文1文の意味を理解するのではなく、その文が使われる場面を意識しながら話の流れ全体を理解する必要がある。聞いたり、読んだりした内容をしっかり理解した上で、「書くこと」の活動につなげる技能統合的型言語活動に慣れ親しませる工夫が求められる。

◎読み手にわかりやすく伝わるよう工夫して書く活動

自分の「意見」は何か、またそう思う「理由」はどこにあるのかなど、どのような内容を書くことが適切であるかを意識させることが指導の上で大切なポイントである。

問題の内容	正答率		目標値	偏差値
	県計	県		
リスニング(内容理解)	82.7	82.7	79.2	49.5
リスニング(対話文の応答)	53.1	53.1	58.8	49.6
語形・語法の知識・理解	65.1	65.1	68.8	49.6
語彙の知識・理解	64.7	64.7	65.0	50.2
さまざまな英文の読み取り	69.3	69.3	63.8	49.9
長文の読み取り	55.1	55.1	55.0	49.5
単語の並べかえによる英作文	71.1	71.1	66.3	50.7
場面に応じて書く英作文	33.8	33.8	30.0	51.0
3文以上の英作文	55.7	55.7	53.3	50.2

3 指導の改善のポイント（全体を通して）

(1) 実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、生徒の学びに向かう力を育成する。

「読むこと」「聞くこと」を通して得た知識等について、生徒自身の体験や考えなどに照らして、「話すこと」「書くこと」に結びつけることが大切である。教材をそのまま解釈するのではなく、生徒の実生活に落としこむような提示の仕方を工夫する必要がある。

(2) T⇔S、S⇔Sの英語使用を増やす。

教室を実際のコミュニケーションの場とする。

①授業は、英語での意味のやりとりを中心に行う。

②生徒が自分の考えや気持ちを表現できるような機会を多く設定する。

③生徒の英語による発言に対してきちんと対応する。生徒の英語を繰り返し、しっかり教師が生徒の発言を受け止めていることを示したり、クラス全体の生徒とその発言の内容を

共有したりする。

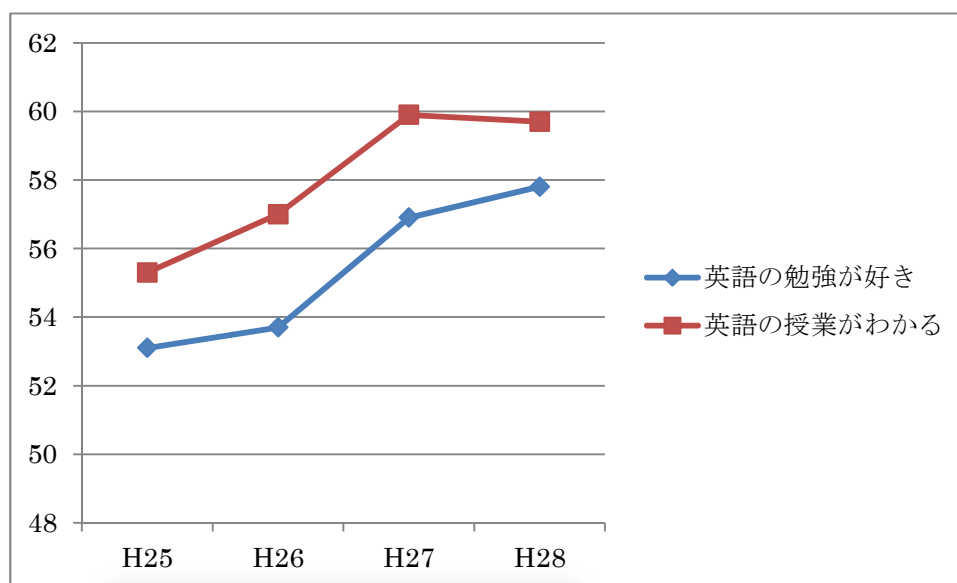
(3) 「英語を使って何ができるようになるか」

「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、4技能に関する学習到達目標を設定し、生徒が身に付ける能力を明確化する。教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者としての主体的に学習する態度・姿勢を生徒が身に付けることをねらう。

昨年の意識調査で、「英語の勉強が好き」と答えた生徒が、この3年間で初めて全国平均を超えた。そして、本年度は、昨年度(56.9)から、さらに0.9ポイント上昇した(57.8)。

生徒自身の英語学習に向かう意欲は、言語習得に必要な「自律的学習者」としての態度・姿勢を身に付ける上で欠かせないものである。指導改善のポイントを参考にしながら、生徒を中心(Student-centered)に据えた、生徒が活動の中心となる授業を、生徒とともに作り上げていきたい。

【参考】



	平成28年度				
	H25大分県	H26大分県	H27大分県	大分県	全国
英語の勉強が好き	53.1	53.7	56.9	57.8	55.9
英語の授業がわかる	55.3	57.0	59.9	59.7	59.9